

たて
あるく

～新しいどんたく商店街
のための3つの法則～

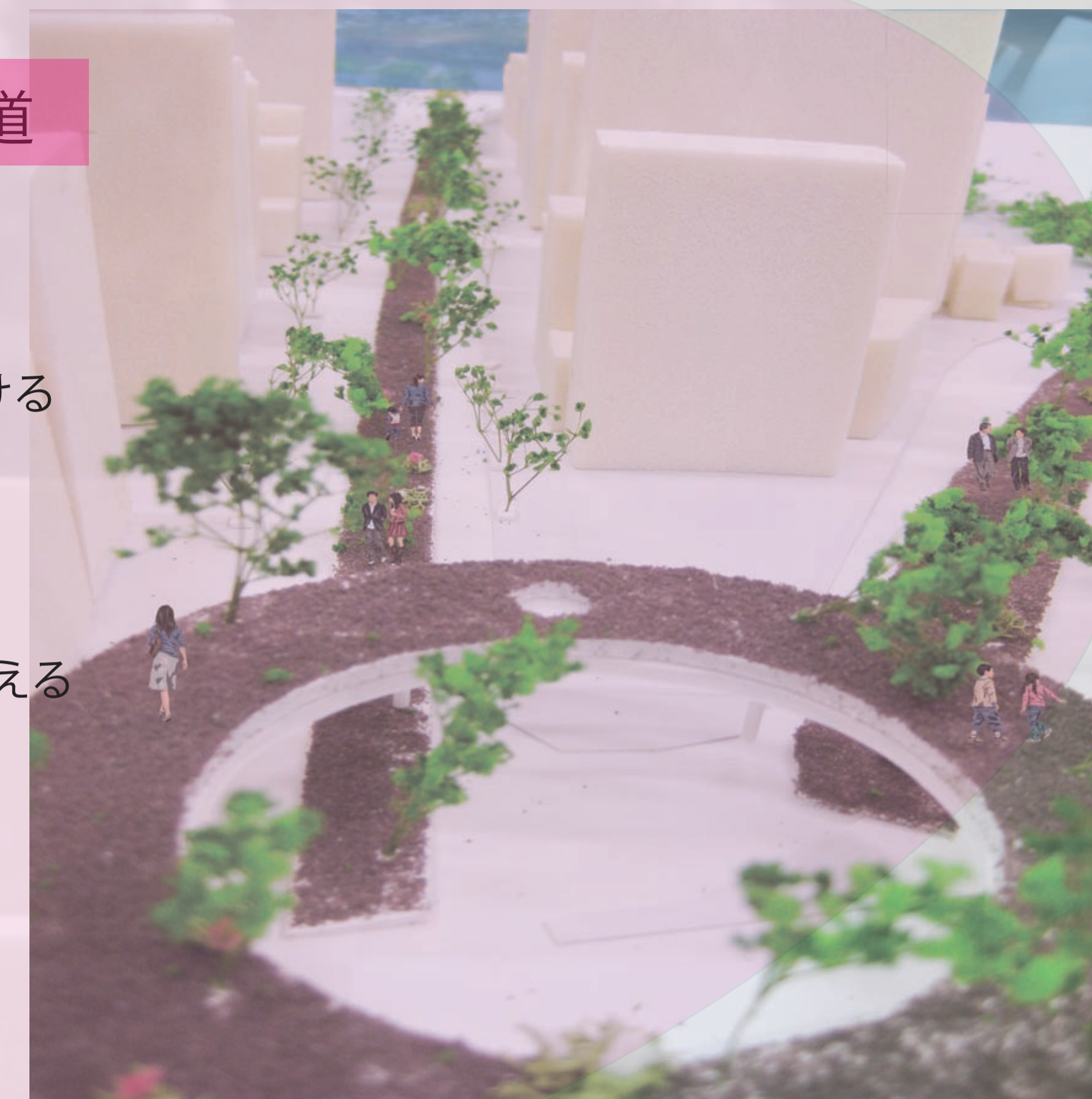
よこにあるく



円形遊歩道

再混雑場で
の人と車の導線を分ける

円形歩道橋から緑道が見える
(ランドマーク性)



緑道

人があきたくなるような
美しいオープンスペース

歩道と歩道の幅を狭め
人が横の動きを始める



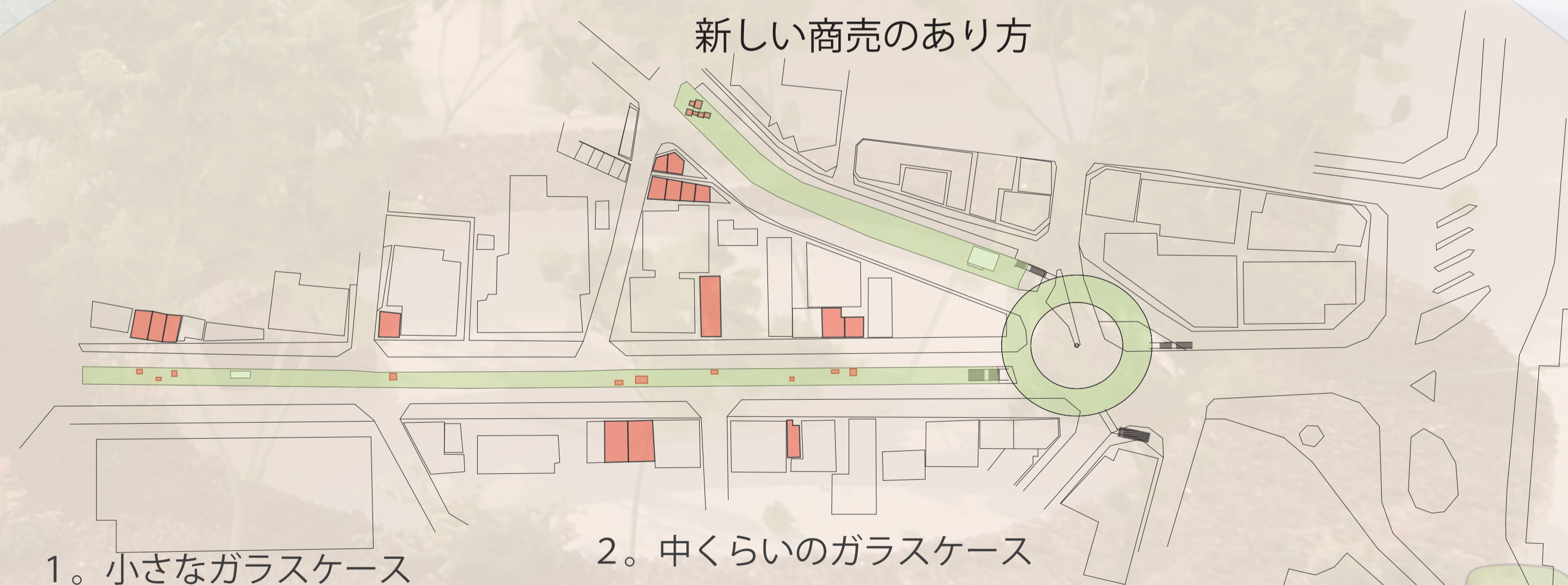
ガラスのケース

区画整備によって埋もれてし
まった小さな店舗のための
新しい商売のあり方

1. 小さなガラスケース
埋もれてしまった店舗の存在を
示す『立体的広告』

2. 中くらいのガラスケース
お店の人が足りない小さな店舗
のための新しい事業『無人販売
店』

3. ちょっと大きなガラスケース
1や2の商売が共感できる人が有
志で開く小さな『出店』



歩道側の店舗とガラスのケース
の関係で横の動きを高める

～人があつまる大井町駅前中央通りアイデアコンペ～

提案要旨説明書

■作品タイトル

新しいどんたく商店街

■提案要旨

どんたく通りを初めて歩いた時、何か違和感があった。それはどこからくるのか？私たちは建物や道のスケールと歩く人の数が合っていないということが原因ではないかと考えた。建物は高いものでは30mを超え、道路幅も12m以上ある。それに対し、人はちらほらとしか歩いておらず、人と街の密度が合っていない。そのことが寂しさを強調しているようにさえ感じられた。

そこで、私たちは大井町らしいスケール感とは何かを考え、道路のスケール、建物のスケール、これら二つのテーマから歩きたくなる街をスタディした。

まず道路のスケールについて。交通量が少ないことに着目し、どんたく通りの車道を狭くした。そして、余ったスペースを真ん中に寄せ集め、緑道とした。街の中心に緑があることは、人々の生活を潤すだろう。

緑道により、歩道と歩道がグンと狭くなり、交通量が少ないどんたく通りでは「横の動き」ができるようになる。これこそが大井町らしいスケール感だと考えた。

また、区画整理により高層ビルが建ったことによって、昔ながらの小さな店舗が周りに埋もれてしまった。しかし、この店舗たちこそ、ずっと大井町を作り上げてきたものである。そこで、新たにできた緑道にガラスのケースをおき新しい商売の仕方を提案しようと考えた。第二のテーマ、建物のスケールに関する提案である。

ガラスのケースの大きさによって、3パターン考えた。一つ目は、人も入れないような小さなケースで、これは商品の一部をディスプレイする「立体的広告」である。二つ目は、人は1～2人しか入れないようなケースで、ここは「無人販売店」である。無人販売は農家が野菜を売っている光景が代表的だが、これは日本だからできることで、日本人の良さだと思う。埋もれてしまっている小さな店舗はどこも、1～2人で店を営んでいるため、緑道での商売のために新しい人を雇うのは困難であろう。そこで、無人販売店でできた商店街が、このような店の可能性を高めると考えた。また消費者に対する新しい買い物の形を提案することにもなるのではないかと。

この二種類のガラスケースで、街の中に小さな店舗の存在が浮き彫りとなり、直接店に足を運ぶ人が増えると考えた。最後に人が2～3人入るくらいの大きさのケースには、この大井町の在り方に共感した人が、思い思いの店を出せる「でみせ」である。この人たちは大井町とは関係のない人かもしれないが、一緒に大井町を作っていくことでありたい。

最後に、この新しい大井町を駅利用者30万人にアピールする、新たなランドマークとして、円形歩道橋を設けた。円形歩道橋は四つの公道が交差する、極めて事故が起こりやすい場所である。そこで、人と車の導線を分けることによって、事故を減らそうと考えた。また、円形歩道橋からみえる、二本の緑道が人々を魅了するだろう。

※なぜこのような提案としたのかという理由や、特に工夫した点、アピールしたい点などを自由に記載してください。